

戦後七十年目の夏

坂元中学校 三年 末留 壮真

戦後七十年。今年の夏、何度も新聞やテレビでみたことばだ。私たちは、もちろん戦争を知らない。「戦争」ときいても、はるか遠くの外国のニュースだとか、歴史の教科書の中の事件だとかいう感じが強い。ただ、修学旅行で長崎の原爆資料館をみたときは、生まれて初めて「戦争」にふれた気がした。館内に展示された恐ろしい写真に、私は息をのんだのおぼえている。黒こげになって、男か女かわからなくなっている死体、皮がただれてもとの様子がわからないう顔、爆風で吹きとんだ家や教会、戦争のこわさを容赦なくつきつけられたような気がしていたのだ。私にとって、ただ一つの戦争に関する思い出だった。しかし、この夏は、戦争中のいろいろな写真や映像にこれまで以上にふれることが多くなり、私の頭の中にはあの長崎の写真がよみがえってきた。そんな中で、私のはっとした新聞記事があった。「白い箱を抱いて泣いていた母」という題名だった。太平洋戦争の激戦の島、硫黄島で亡くなった兄の骨が入った箱を抱えていた。空襲もどんどんひどくなり、学校もあぶなくなつて、机、イスを外に出して授業していたそうだが、ある日、学校から帰ってみると母が亡くなった兄の骨が入った白い箱をもって待っていたそう。そして、あの日の母の姿が、まぶたにやきついていている作者の姿が浮かんでくる記事だった。悲しむ母の姿を見ながらも、戦争が終わったことがうれしくて、これでもう爆弾はおちてこないんだと言っていた。このとき作者は七歳だったそう。いまなら小学二年生の年齢で、空襲でいつ死ぬかわかないという恐怖に耐えていたのだから、それから開放された喜びは、戦争を知らない私でも想像できる。しかし、その喜びは、亡くなった兄が入っている白い箱をだいて泣いている母の姿と結びついた哀しい記憶でもある。この記事

を投稿した井手スミさんは、七十年たったいまでも、この記憶がはつきり残っていると言う。私は、自分が七歳の頃のことをふり返ってみるが、まだほんの七年前のことなのに、おぼえていることはあまりない。それなのに、井手さんは七十年たつてもまだはっきり覚えていてという。戦争の記憶というものが、いかに強烈なものかというところが伝わってきた。また、その記憶の中で母の着物やもつていた箱の「白さ」が、心に残っているものも印象的だった。ここ最近、よく報道された焼け跡の写真の中に、私はこの白い母を重ねてみた。すると、想像は少しずつ広がっていった。空襲の跡つて、土も熱いのかな、まわりには焼け焦げたにおいが漂っているのだろうか、戦争に負けたことを知った人たちは、どんな思いだったのだろう、など、そのときの様子をいろいろと思いうかべてみた。同時に、長崎の原爆資料館で観た数々の写真や映像もうかんできた。

戦争を知らない私たちは、写真や映像と、当時を経験した方々の話などにふれて、そのときの様子や気持ちを想像するしかないが、それはとても大切なことであると私は思う。事実を知ること、当時の人たちの哀しみや苦しみを知ることになるからだ。そして、その場面に自分が立ったらと考えてみると、観ただけでは気づかなかつたいろいろなことを想像できると思う。戦後七十年という節目を迎えたが、今後も八十年九十年と戦争のない日本をつくっていかないとはいけないと感じることだった。